

タイトル 『ハルメリ』 作 黒川 陽子

登場人物 男十人以上、女七人以上

男

男2

女

店長

妻

息子

バイトの子

のし子（雑誌記者）

ワイドショー司会

アシスタント

コメンテーター1

コメンテーター2

アイドル

マネージャー

A D

カズキユイ（ハルメリ美女）

医師

その他大勢

ピンクで統一された舞台。具体的なセットはなく、何にでも使えそうな椅子や机などが置いてある。上手側にはスクリーン、もしくは映像を映せるだけのスペースがある。特別偉大なことをしようと考えているわけではなく、かといってだらけているわけでもない、素直な志の低さを示している。

下手から若い男女が走りこんでくる。笑いながら家具を叩いたり、その周りを回ったりし始める。そうしてコミュニケーションをとっているらしく、彼らは心から楽しそうで、生命力の塊のようだ。

続いて下手から店長が入ってくる。楽しそうにはしゃいでいる二人をみて一瞬あっけにとられ、それからため息をつく。

店長

ちよっちよっちよっちよっ、ほら、ちよっとはい、ちよっとはい

男
（電気を消したりする）
店長
（きつい調子で）そこに座って。

男、女、店長を見、それからしぶしぶというわけでもなく舞台の隅の椅子に座る。机をはさんで店長が立つ。

店長
（持っていたナップサックを見せて）これ彼女のバッグだよな。
女
（頷く）

店長 ナップサックを開き、中ものを出す。ミックスナッツ、おつまみナッツ等ナッツ類の袋がたくさん出てくる。

店長
（出したものを指して）お金払った？

女
（男を見る）

……（お金）は払ってないです。

店長
だよな。じゃあ連絡先書いてもらうから。

女
これ（壁に触れて）、この部屋がーわいい……

男
ここに住もうか。

女
（笑い）「住もうか」って…… 賛成。

店長
（呆れたようにため息をつき、紙とペンを机に置く）住所と名前

女
（一度男の顔を見、書き始める）

店長 何か言おうとして男の方を見る。一方、男も店長の顔を見ている。店長の笑顔の純真さにふと言葉をなくす。

店長
（思いついて）年。年は？

男
（店長と自分を指して）一緒くらい。

店長
（強く）年は？

男
（少しの間のおと）二十一。恥ずかしながら二十一。

店長
身分証明書見せて。

男
（女に）免許しょある？

女
え、ないけど。

男
まじで？ え、無免許で運転してたの？ ダメだよそれ！。

女
えー……

店長
（二人の様子を引いた様子で眺めているが）ないんなら……

男
ありますあります。

店長
（男の協力的な感じが意外で）

男
身分……身分……（と、独り言を言いながらポケットを探る）

店長
酒飲んでる？

男
はい？

店長 酔ってるの？

男 あ、いえ酔ってないです。(ふと、ポケットに薄いカードをみつける。一種、自嘲的な雰囲気もちつつ) ハルメリ証なら。

店長 ……は？(男が差し出したカードを手にとりて見るがわからない)

男 (その反応を意外とでも言つように店長を眺め、女に) ハルメリ。

女 (答えて) ハルメリ。

男 (依然、店長がわかってないようなので) ハルメリ。

女 (答えて) ハルメリ。

二人、秘密を共有している者同士のように、極めて楽しそうに笑つ。

男 (ふと書類を見て) できてんじゃん。(女の前から紙を取り、店長に差し出す)

店長 (見る。とりあえず要点はしっかり埋まっているようだ) これ、本当だろうね。

女 (意味がわからず) え？

店長 ……いや。

店長 カードと紙を持って出て行く。その際、鍵を閉めていく。

女、商品であるカシューナッツの袋を取り、中身を机にぶちまけて食べ始める。

男も食べる。

男 (食べながら) これ食いすぎると鼻血出るよね。

女 出る？

男 出ない？

女 (なんとなく笑つ)

二人、カシューナッツを食べ続ける。暗転。

ディスコ音楽のような派手な音楽が流れ始める。

明かりがつく。舞台上ではおびただしい数の人間が踊っている。うち一人がい

ままで男と女が食べていた机の上のカシューナッツをさらに床にはらまいた。

感染の暗喩のように。

お互いカシューナッツを食べさせあつた人たち、笑いあつた人たち。それぞれに楽しんでる。

ニユースのレポーターのような音声がきこえる。が、音楽の大きさにどこどこでころろ呑まれて聞こえない。

音声 いま私はクラブ「ハルメリ」に来ています……またしても、若者たちの……学

生運動や安保闘争は……抵抗……しかし今回は違います。見てください。ハルメリ」

を合言葉に、若者たちが年配の大人たちといっしょに踊っています……！

続いて悲鳴のような女性の声。

女声 ハルメリは 優しさです……！……！

暗転。

明るくなるとそこは店長の家。台所である。店長は椅子に座っており、下手側には妻がいる。

店長 なんなんだろつね、ほんとに。

妻 万引きするような子でしょ、クスリでもやっつてんじゃないの？(店長の前に「飯の盛りられた茶碗を出す」)

店長 行ったにた行ったにたしてんのよ。最近の若いやつらはほんとへくだらないな。こっちが何言ってもあれ、

妻 クスリでもやっつてんじゃないの？

店長 (「ご飯を食べ始める」)

妻 それよりさ、今度の日曜……

店長 暖簾に腕押し。

妻 え？

店長 (気づいて) え？

妻 今度の日曜

店長 なんだっけ日曜

妻、あきれたように後ろを向き、塗り茶碗に味噌汁をよそる。

店長 でもオレはすぐかったぞ。(動きをつけながら)ピシャッ、ピシャッ、ってひっつかまえてね、ほらこつちこい、って言っつて。

妻 ……(店長の前に味噌汁を出す)

店長 (味噌汁を食べ始めながら)ほらこつちこい、っつて。むこつもさすがにいけな
いと思っただんたろつね、素直についてきたよ、

妻 それあなたじゃなきゃダメなの？

店長 あああ、あそこまで毅然と……

妻 そんなくだらない人たちの相手、若い子に任せればいいのに。

店長、しばし黙って妻を見るが、にわかに妻の言った意味がわかって手元が狂う。茶碗が落ち、味噌汁がこぼれ、店長の胸を汚す。

やりきれない空気が流れる。

妻 しっかりしてよ……

妻、布巾を出して店長の前に投げる。店長、投げられた布巾を見ているが、

店長 (試すように) 店長の仕事なんだよ。

妻 ……。

店長 ……。(仕方なく布巾で前を拭き始める)

別の空間に光が差す。彼らの息子の部屋。息子がオロナミンCの空き瓶を使ってミラミッドを作っている。

妻 道男。(店長の方を見て) 道男、もう二日お風呂入ってないわよ。

店長 そうか。

妻 そうかって……。(振り向いて店長の方を見る。店長が胸を拭いている様子が鼻につき) あなたがしっかりしないのがいけないんですよ。

店長 え？

妻 え？

店長 (濡れた服を指して) ちょっとこれ、オレ脱ぐわ。風呂……

妻 (苛立ちが爆発し) 万引きなんてね、される方がマヌケなのよ、あんた舐められるのよ？

店長 (立ち上がって) お前……。(言葉を搜すが)

突然、息子がオロナミンCの空き瓶で作ったタワーを崩した。空き瓶が倒れ、ぶつかり合う音が響く。台所にいる二人は天井の方を見る。

店長 もついい……

店長 汚れた布巾を放り、部屋を出て行く。妻、布巾を拾ってこぼれた味噌汁を拭き始める。上手側でドアが強く閉まる音がする。妻、立ち上がって電話をとり、ダイヤルを回す。

妻 (相手が出るのを待ち) 私さ、私さ、ほんとうもつつ、やなんだよ(泣きはじめる) 私さ、私さ……

夜の道。

店長が上手から歩いてくる。ふと、外の寒さに気づき、濡れたシャツの胸元の部分をつまんで肌から離す。下手からラフな格好をしたバイトの子が歩いてくる。

バイト 店長？

店長 おあ、どつしたの。

店長、汚れた胸の部分を隠す。

バイト 今日バイト休みだったんで……（店長の様子が気になる）

店長 出かけるの？ こんな時間に？ 男のどこかい？

バイトの子、店長の腕に触れて胸元を見る。汚れているのに気づく。

バイト 具合悪いの？

店長 え？

バイトの子、ハンカチを出して店長のシャツを拭きはじめる。

店長 ……。

バイト そうだ、ハルメリ行かない？

別の空間に光が当たる。スーツを着たキャリアウーマン風の女性「のし子」である。「声」が話しかける。

声 では次、来月号の企画について、説明。

のし子 はい。月刊「サードファッション」2月号のメイン企画として、私はいま若者たちの間で人気の「ハルメリ」を提案したいと思います。（店長とバイトの子を指して）こちらをご覧ください。

「ここから店長とバイトの子とのやりとりは、資料VIERのまじりに扱われる。

店長 ああ、オレそついつの……え、（バイトの子の出したカードを見て）

バイト ハルメリ。

店長 これ今日……（万引犯のことを言いかけてやめる）なんなのこれ。

バイト 会員証ですよ。

店長 会員証？

バイト クラブの。

店長 クラブ？（発音が違う）

バイト クラブ。

のし子 「ハルメリ」は会員制のクラブで、いま独特のやり方で注目を集めています。

店長 （自分の腕をつかんでいるバイトの子を気にして）あ、オレ……

バイト お金かかりませんから。

のし子 今までクラブ（発音が違う）クラブは若い子のためのものと思われていました。

しかしクラブ「ハルメリ」に特徴的なことは、

バイト 行こう。

のし子 老若男女誰でも参加できること、そして、そこに「お金」と「つもの」がほとんど介在していないということですよ。

バイトの子、店長を連れて出て行く。

別の空間に光が当たる。「妻」が受話器を置いたところ。ふと気になって壁にかけられた時計を見る。

人が大勢駆け込んできてそこはクラブに変わる。

クラブ「ハルメリ」。

店長がむしるバイトの子をひっぱるようにハイテンションで入ってくる。

店長 うわなっつかしいなあ。あ、ミフィーボールだ。

バイト 店長も昔は、

店長 え？

バイト こういつとこよく来たんですか？

店長 そのころは「ディスク」って言ってたけどね。(高いところを指差し)へえ。あ、ほら。ああいうところにDJがいて。DJわかる？ ディスクジョッキーね。鏡の前で踊ってるナルちゃんなんかもいて、

バイト ナルちゃん？

店長 ナルシスト。オレなんかもナンパすれば女の子が5、6人くらい喜んでついてきたものだったな。

バイト へえ……。(少し引いている)

のし子 このように、一見したところ中身は普通のクラブと変わりません。しかし特に「ハルメリ」だけに特徴的なことがあります……

バイトの子、店長の手を引き踊っている群衆の中に入る。

のし子 例えばこれから……

会場の熱気が頂点に達し、音楽がうるさくなる。歓声、笑い声。のし子も声を張り上げてなにやら話しているが、ほとんど聞こえない。

声 ポリノームを下げたらどうですか？

のし子 あ、はい。

のし子が操作すると、音楽の音と群衆の騒ぎが小さくなる。

のし子 (改めて) 例えばこれから、

店長とバイトの子との話が聞き取りやすくなる。

バイト (姿は見えないが) 店長さんて……大変なお仕事ですよな。
店長 ……。

のし子、しばし黙って静かに踊る群衆を見ている。突然、上の方の空間が明るくなる。

会場で歓声が起こる。

のし子　これが、クラブ「ハルメリ」の看板イベントです。

店長　なに？

バイト　ビヨルン・タイム。

天井の方から巨大なビヨルン・アンドレセンの写真パネルが降りてくる。会場から喝采と笑い声、そしてあからさまなため息がもれる。

バイト　綺麗ですよねー。

店長　ビヨルン・アンドレセン。

バイト　知ってるの？

店長　『ベニスに死す』だろ？　オレが子供の頃に人気が出てあれ、日本にもきたんじゃないかな。

誰か　シート。

会場を静寂が包む。ひとりひとりがビヨルン・アンドレセンの写真を見上げたり、祈るような格好をしたりしている。

のし子　少し前まではキムタクの写真が使われていたそうです。

誰かが「ハルメリ」と言う。するとそこからさざ波のように「ハルメリ」という言葉が広がっていく。お互い顔を合わせ、笑顔で「ハルメリ」と言う。肩を組み合う人もいる。バイトの子も店長に「ハルメリ」と言う。店長は戸惑う。

店長　（写真を指差し）え、あれ……

バイト　すごいですよ、誰かがネットでみつけてきたんですよ。

のし子　社会ではもちろん、例えばこういった社交場でも、魅力的な人が有利です。若かったり、整った顔立ちをしていたり。しかしそれでは不平等が生じてしまう。一人が異性を独占してしまい、踊る相手さえみつからない人が出てしまうのです。でもそんなの嫌じゃない。（にわかに興奮して）どんなにブスでも根暗でも年食っててもここにこされたいでしょ?!　楽しく踊りたいでしょ?!

声　落ちついて。

バイト　（店長に説明して）だからね、みんな仲良くしようねって。

のし子　ここでは、みんな最初から負け犬なんです。圧倒的な存在の前で誰もが欠陥品であることを知り、つまらない競争をやめる。

店長　お前らプライドないのか……

のし子　相手も自分もたいした人間でないことを知り、全てを受け入れる。

バイト (慌てて駆け寄って) 店長。

店長 なんなんだよこれは。恥ずかしいと思わないのか。

バイト 思うよ。だから。(冗談のよつに、揶揄するよつに軽く) 超ムカツク。

店長 は？

バイト 冗談じゃないですか。

のし子 そういう、冗談なんです。ここが重要ですよ。これは冗談なんです。決して深入り
はしない。ここに来て普段軽んじられている自分を受け入れ、癒されたり、またすぐ社
会に戻っていく。

遠くで「ぶざけんなよー」という男の声が聞こえる。

会場の皆がそちらの方を見る。

バイト (店長に諭し) 本気で怒ったりすると、ハブかれますよ？

のし子 いつでも消せるけどなんとなく居心地が良い、それがハルメリなんです。

のし子に当たった光、消える。

店長 (叫び声がした方を見て) あね。

バイト え？

店長 今日万引きしたやつらだ。

バイト えっ、うちの店で？

店長 オレがつかまえたんだよ。いちおう警察にも引渡したんだけど。

バイト 店長がつかまえたんですか？

店長 あの二人ね。

バイト すこい……

店長 ……。

バイト ?

店長 すこい？

バイト だってすこいじゃないですかあんな体格のいい人(つかまえて)……

バイトの子、店長の表情から彼も肯定に飢えている人間の一人であることを悟
る。二人、踊る群衆の中に入っていく。

続く